

# 宗教と社会とアイデンティティ

信仰がもたらす生きる力・人と人を結ぶ力と、  
日常からの逸脱及び他者との乖離傾向との関係性

群馬社会福祉大学  
橋本 広信

# 〔信仰はなぜ人に力を与えるか①〕

- アイデンティティの観点から
- エリクソン……

「すべての人間の内にはこれら両極のアイデンティティ、すなわち、時間と空間に制約されているアイデンティティと、超越的なアイデンティティのいずれをも受け入れる素地があるのだ…」

(『歴史の中のアイデンティティ』, 1974)

# 〔アイデンティティの観点から〕

- 時間と空間に制約されているアイデンティティ⇒「日常世界」と日常の〈わたし(とその生育史)〉に根ざすアイデンティティとする。
- 超越的なアイデンティティ⇒日常世界と日常の〈わたし(とその生育史)〉に左右されない超越的な「非日常的世  
界」に根ざすアイデンティティとする。
- アイデンティティにはこの両側面が含まれる。
- \* この両者の関係性(あり方)と個人及び集団を取り巻く「社会」との関係性において、個人のアイデンティティは影響を受ける。(力を得たり、日常から逸脱したりする)。

# 〔非日常的ストーリーを「信じること」によるライフストーリーの転換〕

「〈宗教的であるとは、人の発達にいかなる意味を持つか〉という問いに変えてみるならば、エリクソンにおいてそれは、〈わたし〉が〈わたしを越えたもの〉との関係のなかで〈わたし〉を越えてゆくこと、と説明されることになる。」

(西平直『エリクソンの人間学』1993)

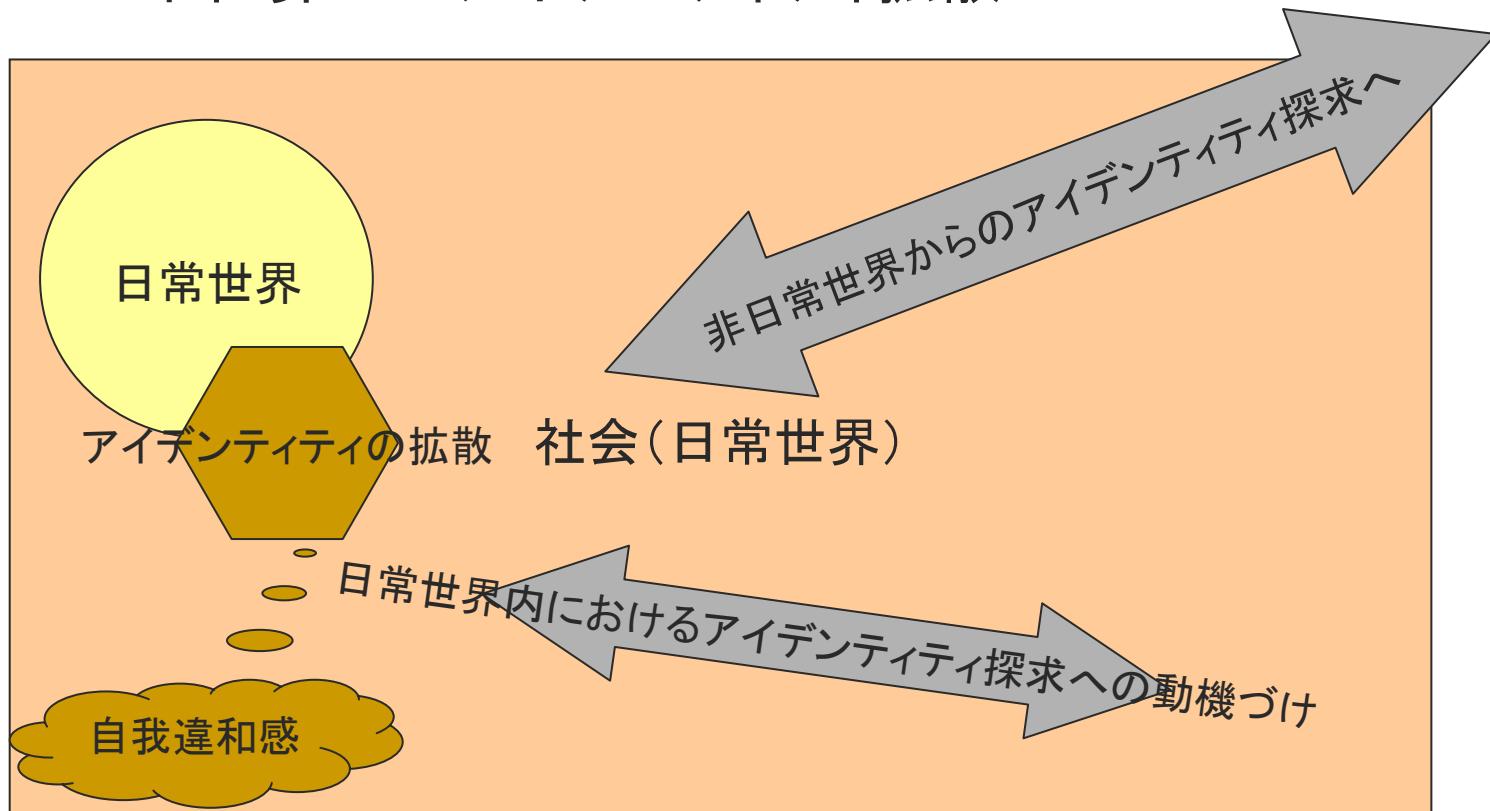
- \* 非日常的な(一般的な生死・幸不幸の因果関係を含む)ストーリーによって、日常の(〈わたし〉を含む)ライフストーリーを再構成することで、日常の中で出会う諸問題や不安、悩みなどの感覚を乗り越える(解釈し直す)ことが可能となる。…生死・幸不幸の問題は、「科学」が及ばない領域であり、「宗教的」な面からしか根本的には答えを出しえない。(これが宗教のもつ光と影をもたらす面でもある。)

# 〔転換後再構築される日常世界〕

- 「その時、〈わたしを越えたもの〉が何であるかは問題ではなく、もっと言えば、その〈わたしを越えたもの〉と〈わたし〉との関係それ自体が問題の中心なのでもなくて、この関係において、いかに〈わたし〉は〈わたし〉を越えてゆくか、そして同時に、越えてゆきながらどのように再び〈わたし〉として生きるのかという、言ってみれば、そこで体験される〈再生のダイナミズム〉にこそ目をとめているのである。」  
(『エリクソンの人間学』、1993)
- \* 越え出た後には、やはり新たな形で再生された「日常」の中で生きなおす(社会との関係も新たに再構築される)必要がある。危機の時は永遠ではない。非日常的世界観から再構築された日常世界が、他者との共有世界である「社会」と共生できる関係にあるかが、平時にクローズアップされてくる。

# まとめ①アイデンティティ拡散が背景にある場合のアイデンティティ探求の方向性

## ■ 日常世界でのアイデンティティ拡散



# 〔非日常的世界からのアイデンティティ再構築の特徴〕

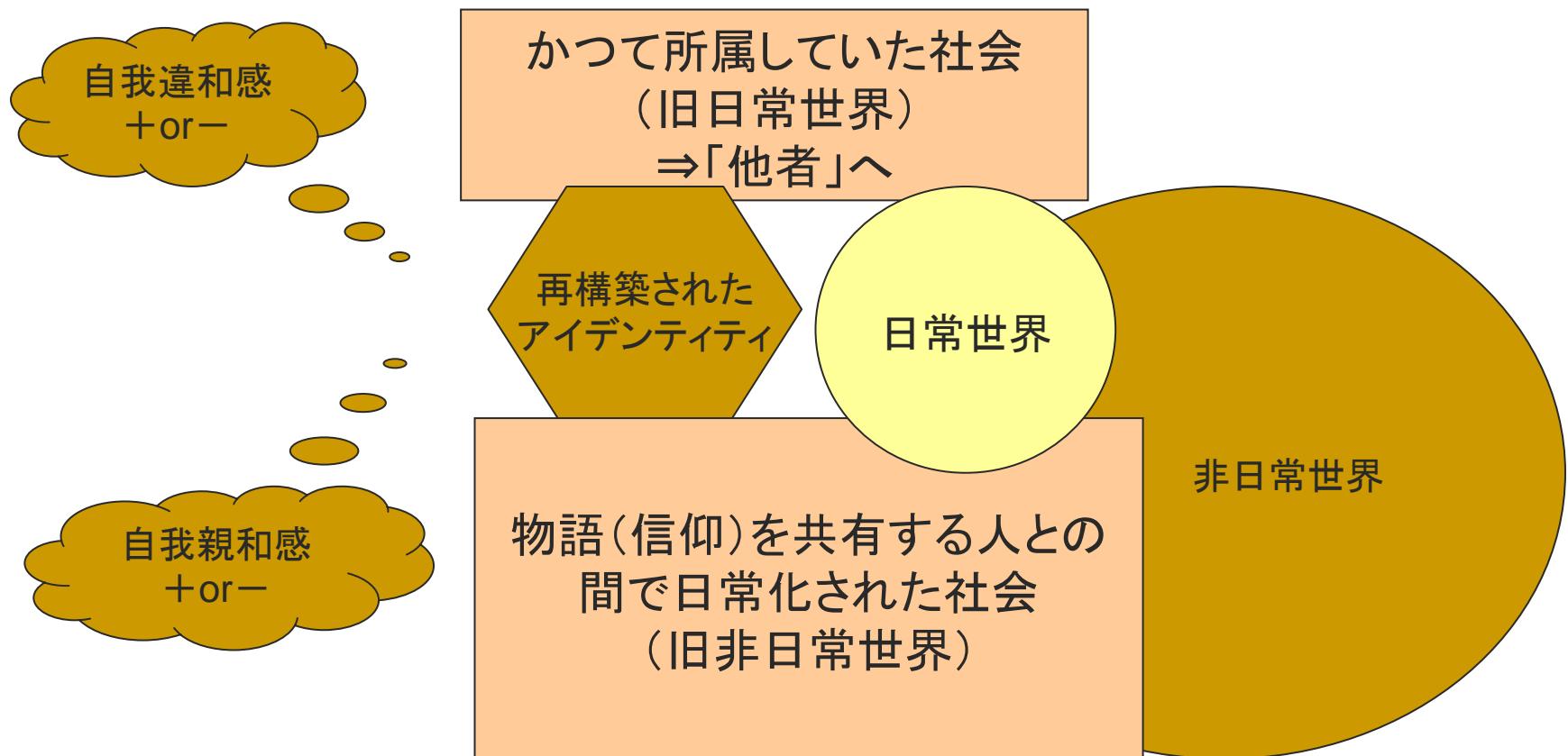
- 時空の制約を受けて現実にとらわれないのでどのような状況でも意味づけが可能
- ⇒〔問題点①〕ただし同じ「信」を共有する人の社会にとらわれる。(非日常の日常化) \* 同じ信仰をもつ人と物語を共有できてこそアイデンティティの安定と活力を得ることができる。
  - \*・・・完全な「超越的アイデンティティの不可能性」・・・特にテクストや同じ教祖・神を共通にする場合には、超越的に他者と物語を共有するのは不可能に近い
- ⇒〔問題点②〕閉じた時空において、自己完結的な物語の中のみで生きやすくなる。「信」を共有しないものにとっては意味をなさないものに基づいたアイデンティティという形をとる。
- 自分が実際に体験し、知覚しないことがら（ほぼ証明不可能な事象）について「信じる」という行為、感覚、決意を必要とする
- ⇒〔問題点③〕信じない「他者」とどう向き合うかという課題をもつ
- ⇒アイデンティティの「強度」と「硬度」に関係
- ①②③、すべて個人及び信仰集団と社会との関係性に影響

# 問題点①および②に関連して

非日常的世界からのアイデンティティ再構築の特徴：

⇒二つの世界の間でのダイナミズム

- \* 非日常世界と旧日常世界がいかなる重なり具合をもつか、また、対立的か否かが重要



# 〔問題点①および②に関連して〕 物語の閉鎖性について(1)

- 「物語が閉鎖的である(閉じている)というのは、その物語がそれ以外には語りようがないこと、すなわち、その物語だけがその件についての誰もが合意する語り方であるということを意味している。」(他の物語を認めない姿勢)
- ⇒独善性の源でもありアイデンティティの硬度(信の力ともなる)に影響を与える。ある程度閉じていないと、「信」の力を得にくくい

# 〔問題点①および②に関連して〕 物語の閉鎖性について(2)語り方

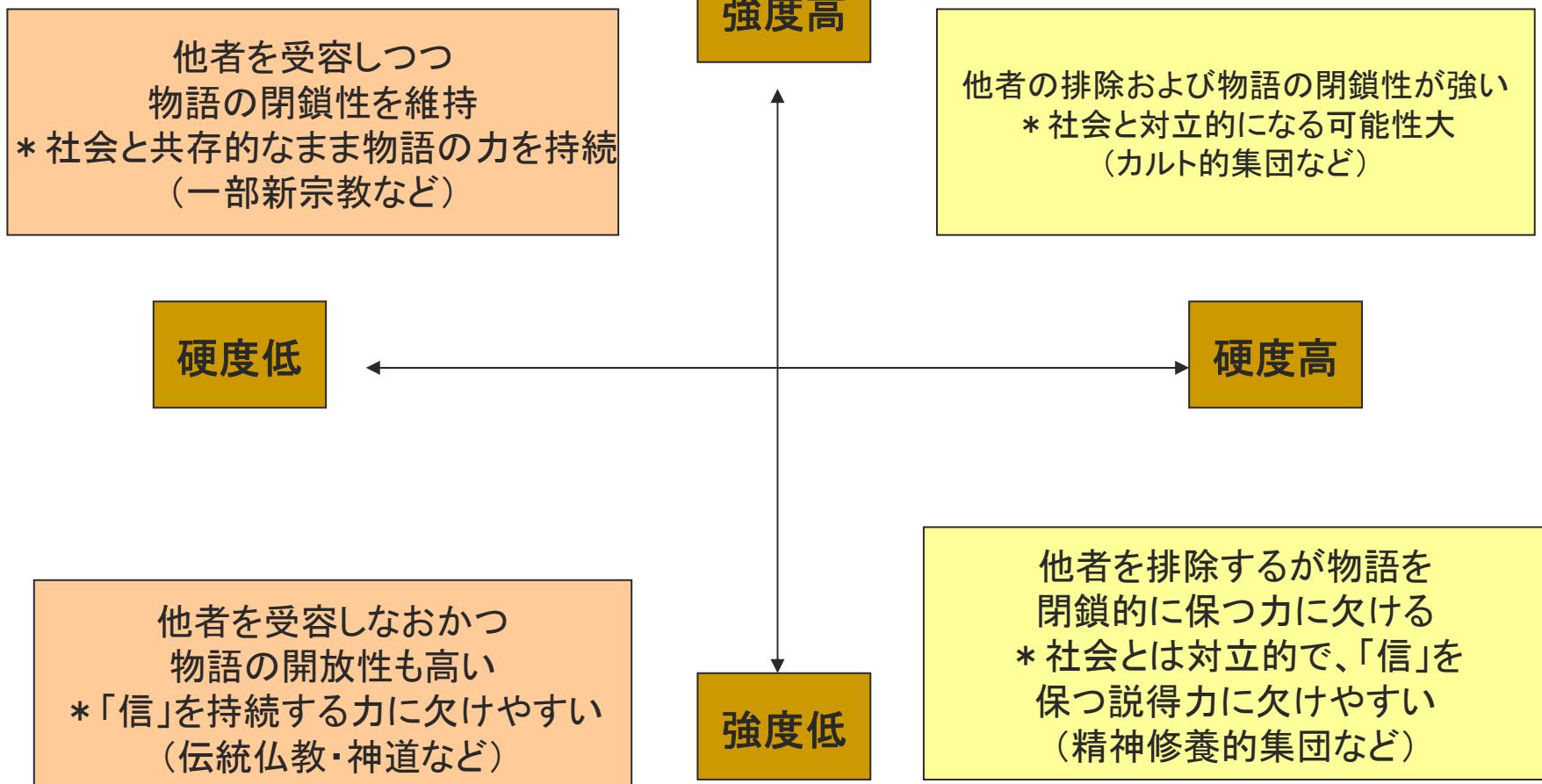
- 「もう少し細かくいうと、それは、一方では別な語り方を排除することである、他方では、メタコメントを排除することだ。別な語り方を排除するためには、物語の結論からさかのぼって、語りに組み込むべきエピソードを慎重に選び出し(無関連なエピソードを除外し)、それらの間に食い違いが生じないように注意深く配置しなければならない。」 ⇒社会にあわせて変容する

(社会との関係を含みつつ物語の強度に影響)

- (浅野智彦『自己への物語論的接近』、2001)

# 〔問題点③〕「信」を支える他者との関係。物語の「開放性/閉鎖性」と「他者の受容/排除」の観点から

## ～アイデンティティの「強度」と「硬度」～



# 〔「信」による飛躍〕

- 宗教(とそれ以外にも)にはある種の虚構と現実が伴う。  
(科学的証明が不可という意味で)
- 「虚構と現実とを分離して理解すると、虚構や嘘で固められた我々の現実とは別のところに、本来あるべき真実の社会秩序が存在し得るかのように考えてしまう。しかし実は、我々が生きている現実はいかなる場合でも根本的な意味での恣意性を含んでおり、絶対的根拠に支えられることなしに成立している。そして無根拠であるにもかかわらず世界が円滑に機能するためには、人間によって様々な虚構が生み出され、それらが人間によつて“信じられる”ことが必要になる。言い換えるならば、虚構の物語が自然に生成されると同時に、その虚構性が人間自身に隠蔽されなければならない。」  
(小坂井敏晶、『民族という虚構』、2002)

# 宗教的・超越的アイデンティティの例 社会との調和方向への変容を遂げる団体として

\*時間の都合上割愛の可能性あり・・・

◆歴史的に社会との関係性において種々物語を変容させてきた団体…創価学会を例として

・法華経に説かれる世界観をベースに、特に「地湧の菩薩」としての超越的アイデンティティをもつことに注目⇒朝晩の勤行などの儀式はもちろん、体験や危機状況の日蓮仏法的解釈(非日常的解釈)は日常的。

(生命に潜在する魔と修行を妨げる働き(三障四魔)に負けず、法華経の信仰と布教活動(折伏)により、諸天善神(法華経を護持する者を守る働き)の加護のもと、宿業を乗り越え(かなわない祈りはないとする)、広宣流布への使命を末法において果たす存在(地湧の菩薩)として個人は位置づけられる⇒宿業に囚われた日常からの「人間革命」(自身の生命に内在する仏界という強い生命の顕現)による自己超越と、実際の日常生活での価値の創造を重視する。)

# 宗教的・超越的アイデンティティの例 社会との調和を放棄した団体として

\*時間の都合上割愛の可能性あり・・・

◆社会との関係性において最後まで調和的位置づけをもちえずに、(むしろ否定的アイデンティティの行き着く先として)破綻した団体

…太陽寺院を例として

・ 西欧中世のテンプル騎士団の継承者を自称し、1981年頃から活動。ディ・マンブロとリュック・ジュレを指導者とし、清潔や食物へのこだわり、徹底した秘密主義、エリート層信者の存在、選民思想、終末論、全財産の寄附と激しい労働など、オウム真理教との共通点を感じさせる側面を持つ。

バラ十時の隊列に加わるものには「不死」が与えられるという。彼らはこの世のものではなく、祖先から受け継いだ真の知識の所有者であり、意識の進化のために活動を行う。しかし、「退廃した人類によってつくられた制度にくわわることを拒絶」し、シリウス星の司令にしたがって、「詐欺師や無知の者たちによって汚されないように」、秘密の聖堂(表面上自然農場などに偽装)を爆破し、中心者たち計、74名の死者を出すという形で、集団として表舞台から消えたとされる。

「**「真のアイデンティティは現実の三つの側面の確認に基盤を置く」**…エリクソン

- 事実性(factuality)…その時代に利用可能な観察方法や作業技術によって検証可能な、事実とか、資料とか技法から構成されている領域。 (客観性)
- 現実感覚(sense of reality)…人々がこれまでとは違った全く新しい形で歴史を体験する、つまりあらゆる事実や数値や技法を統合して捉える。…創造力に充ちているという特性をもつとともに、歴史への参画者を極めて具体的な作業に向けて駆り立てる。(物語性)
- 実在性(actuality)…人々が共通の目標に向かって、互いに活気づけ、また生の息吹を与え合う、という相互関係の新しいあり方。 (物語の共有性)

# 〔現実の三つの側面と「信」の力と 社会との関係〕

- 事実性 (factuality) … (客観性) が強いほど、「信」を強化する。…自身の体験、他者の体験、身体的感覚、ヌミノース的感覚、知識としての合理性、体系性 ⇒ 一般社会(他者)との関係性を孕む。
- 現実感覚 (sense of reality) … (物語性) が強いほど、宗教団体へのコミットが強くなり、布教活動、会合など、宗教活動への行動も強化される。「他者の物語」を受容しているかどうかによって、排撃的になるかどうかは影響を受ける。
- 実在性 (actuality) … 多くの「人々」と物語を共有できれば心理的な力を得やすい。「人々」の中に同一信仰をもたない者を含めるかどうかが実在性の幅になる。幅が狭すぎると他者との対立を生じる。幅が広すぎると力が拡散する。(物語の共有性)

# 〔宗教間の対立の未来は…〕

## 〔アイデンティティ自体に孕まれる諸問題〕

- アイデンティティは他者にとっての善悪など、実際的な倫理と無関係に成立する。
  - ・・・無数の宗教の成立の可能性
- アイデンティティは自我を統合する機能をもつが、それは束縛をも意味する。・・・イデオロギーによって力を得ると同時にアイデンティティ自体が「他者」を生み、「他者」を排除する構図が成り立ちやすい
- (超越的にも現実的にも)自分が自分であり、誰かが誰かであることを完璧に可能とするアイデンティティのあり方はなかなか実現しがたい。
  - ・・・あらゆる他者に開いた形で、完璧に超越的・包括的なアイデンティティは成立しない。・・・拡散してしまう。